HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	福音書における〈これらの小さいもの〉
Author(s)	三枝, 礼三
Citation	基督教学, 16, 28-31
Issue Date	1981-07-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46399
Type	journal article
File Information	16_28-31.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

福音書における〈これらの小さいもの〉

三枝礼三

1 問題

イエスが言及する「これらの小さいもの」は、特にマタイ一〇章と一八章、及びマルコとルカにおける並行記事に集中している。

ところが、E・トロクメが相互関係不明の断片の寄せ集めの章としたそのマタイ一〇章と一八章に含まれる「これらの小さい者」章句も、決して自明な章句ではないだろう。R・ブルトマンでさえも、「このことばの伝承は錯綜しているので、その解明に当っては殆んど確実性を期し難い」と言っている。その錯綜の原因は、T・W・マンスンによれば、イエスが或る事柄は幼な子について語り、また或る事柄は伝道に派遣する弟子たちについて語っていること、しかもイエスにはその弟子たちを「子たち」と呼びかける習慣があったことにあるという。

そこで、この「小さい者」は、もともと「こども」のことを取扱っていたのが原始教会の用語習慣の中で身分の低い信者を意味するようになったものであるか。それとも、元来それは「弟子たち」を意味することばであったのか。さらに、イエスはこの異常な表現法で何か特別なことを語っているのであるか。以上、三つの場合のこれはいずれであるかというのが、われわれの当面の問題である。

2 〈こども〉説

第一の、いわば〈こども〉説をとるのは、R・ブルトマン、シュトラック＝ビラベック、T・W・マンスン等である。

ブルトマンは、マルコ九・三七―四一とマタイ一〇・四〇―四二とを比較検討して以下のように結論づける。

マルコの「幼な子」(παιδίον)とマタイの「小さい者たち」(μικρῶν)が原初の語句で、本来の意味で用いられていたことは疑いない。この章句の原形には、イエスの人格にかかわる言及は含まれていなかったろう。従って、これは、幼な子に対する親切は神ご自身に対してなされたものと神から見なされるという、より古いユダヤ的教

えであったろう、と推定する。マタイ一八・六と一八・一〇の「これらの小さい者」も同様で、子どもの取扱いに関する古い箴言が、「私を信ずる」という付加語によってキリスト教化されたものであろうと推定する。しかし、ブルトマンは、そのいずれの場合も、言うところの古い箴言がどこから由来したものかその起源はもはや発見できないと告白している。

この〈こども〉説は、「小さい者」が単独で用いられる場合「生徒」または「弟子」を意味する例はラビ文献には見出されないというビラベックの証言によっても補強される。にも拘らず、「これらの小さい者」章句の起源を明らかに出来ない弱点はなお残る。

3　〈弟子〉説

第二の、いわば〈弟子〉説をとる学者には、A・シュラッター、E・シュヴァイツァー、O・ミッヘル等がいる。ここでは、ミッヘルの見方だけを紹介する。

ミッヘルは、マタイ一〇・四〇―四二を統一した全体として見ようとする。すると、ここには、予言者と義人とそして最後に「これらの小さい者」という考えぬかれた相互関係が見られる。だから、「これらの小さい者」は、予言者または義人と同等の精神的威厳を要求しているわけで、「幼な子」のこととは言い難い。むしろ、この語句によってイエスは、（あたかも自分に属する者たちに対するように）彼らに特別な保護を与えると言っているのであって、「これらの小さい者」とは、弟子たちに対するイエスの独創的な呼称だと言った方がより適切であろう、という。

ミッヘルは、福音書記者には「弟子たち」と「これらの小さい者」とを意味上は区別できなかったとし、マタイ一〇、一八章とその並行記事を全体として見ることにより、「これらの小さい者」は弟子たちを意味すると結論づけた。しかし、T・W・マンスンによれば、「これらの小さい者」は意味上「弟子たち」と区別され得なかったのみならず、「幼な子」とも区別されなかった。けれども、初代教会は幼な子らより最初の弟子たちのことに一層強い関心を向けていたので、「幼な子」或は「小さいもの」に関することばを弟子たちのことに変えてしまう傾向を伝承は持っていたに違いないと言う。そして、ミッヘル同様全体から見て、マンスンは、マタイ一〇・四二の「これらの小さい者」は、マルコ九・四一の「あなたがた」より古い語句で、元来「幼な子」を意味し

ていたと思われる、とまさに反対の結論に達している。

4　〈こども〉説でも〈弟子〉説でもなく

J・シュニーヴィントは「小さい者とは、非常に広い意味における低い者であり、貧しい人、無教育の人、社会的劣等者、そして確かに子供たちも含まれている」という。しかし、この第三の説は、「これらの小さい者」を特定することより、むしろこの異常な表現法でイエスが語っている何ごとかを探究しょうとする説だと言ってよかろう。

例証の引用は割愛せざるを得ないが、ユダヤ的ラビの用法においても、ギリシャ・ヘレニズム世界の用法においても、「大きいもの」は特別な栄光を帰せられているのに「小さいもの」は通常軽視または蔑視されている。これに対し、イエスの「これらの小さい者」は、隠された内的価値をもつものであることを逆説的に強調しているように見える。即ち「小さいもの」は、マタイ一八章一―六とその並行記事において、「自分を低くする者」と対応させられ、共に悔改めの章句の中におかれている。さらに、「心をいれかえて幼な子のようにならなければ天国にはいることはできない」の「心をいれかえて」(στραφῆτε) は、エレミアスによれば、「再び」子どものようにならなければ、と訳さるべきであって、それは、再び神を「アバ」と呼ぶことを習い覚えることにほかならない、と言う。

それなら、通常軽蔑の念をこめて語られていた「小さいもの」をそこに居合わせる者を指示する語として何故イエスは用いたのか。イエスに軽蔑の意識がなければなおさらである。そこには、この語を敢て用いざるを得ない或る緊張した状況が想定される。即ち、子ども乃至は弟子たちを「これらの小さい者が」と軽蔑の念をこめて呼ぶ人々の只中で、イエスはことさらに彼らの売りことばを買うわけである。そして、まさしく諸君の所謂「これらの小さい者」のようになって、神を再び「アバ」と呼ぶことを習い覚えるのでなければ、諸君は神の国へ入ることはできないと言っているのではないか、と想定するのである。

それゆえ、「これらの小さい者」とは、子供を意味するとか弟子たちを意味するとか特定され得るいわば実体的呼称ではなく、或る緊張した関係状況下で〈売りことばに買いことば〉式に発せられたいわば逆説的な関係概念的呼称とでもいうべきものではないか、というのがこ

の拙い試論の一応の結論である。

参考文献

R. Bultmann, Die Geschichte der synoptischen Tradition, 1931. E. tr. 1963.

Strack-Billerbeck, Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch, 1922–8.

O. Michel, Diese Kleinen-eine Jüngerbezeichnung, 1937.
Theologische Wörterbuch zum neuen Testament, "μικρός" 1966.

T. W. Manson, The Sayings of Jesus 1954.

J. Schniewind, Das Evangelium nach Matthäus, (NTD) 1960.

E. Schweizer, Das Evangelium nach Matthäus. (NTD) 1973.

J. Jeremias, Neutestamentliche Theologie, 1973.

E. Trocmé, Jésus de Nazareth vu parles témoins de sa vie, 1972.